

「コスモポリタニズム」と「ファンダメンタリズム」

センター研究員（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭） 橋 本 渉

学校という現場サイドと大学という研究サイドが連携協力をするには、現場の教育技術や運営システムを大きく変え、教育哲学や法制度までも変革する機会を創出する。日本の学校教育が教師の経験のみに依存し閉じた社会となっていること、教師間の相互交流が沈滞していることは、深刻な問題である。教育現場に研究の知的成果が持ち込まれることは、また、現場で様々な知的成果を発見できることは、意義深い。そうした、連携は少しずつ始まっている。しかし、東大附属学校では予備的な段階に止まっている。学校臨床センターと附属学校が本格的な連携推進を目指す提案、アイデア提供を行なうことが研究員の役割の一つである。実際、協同を現場に持ち込むにあたって、大きなハードルが存在している。研究者は自己の研究がどのようにしたら現場に理解されるか、例えば、論文の体裁など改良を始め、その読み易さに工夫を凝らしたりしている。それに比べ、現場の教員が自己の教育活動にその成果を利用しようとする段階にたどり着くまでには、なお時間がかかる。この協同を推進しようとする提案には、いささか本校現場は戸惑いを感じているようだ。この問題を異文化交流として考えてみたい。

地球規模の世界的視点に目を転じてみる。異文化どうしの触れ合いと融合は好ましいことと捉える「コスモポリタニズム」と本来の秩序と伝統を重んじる「ファンダメンタリズム」の対立を招くと21世紀の世界に警鐘を鳴らしたのは、イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズである。「コスモポリタニズム」は、文化には優劣はないとし、相対主義の立場に立つ。しかし、その主張は「ファンダメンタリズム」を脅かす。交流から生じた新たな価値によって既存の価値は変更をせまられ、それは自己の

利害に大きく影響されるからである。絶対と信じた価値観、行動・生活様式が崩壊し、価値体系の再編、再統合を迫られる。そうしたことは世界規模にかかわらず、我々の身近な世界における、小さな協同を行なう個人にも生じている。ここで我々が注意しなくてはならないのは、「コスモポリタニズム」を強制することは、自己の文化とは異なる価値を押し付けられる限りにおいて、一方の他者に「ファンダメンタリズム」を脅かすという事実である。むしろ、「コスモポリタニズム」が個々の文化に配慮した寛容的精神を含んだものであるにせよ、「ファンダメンタリズム」に変更をせまる状況の力によってその寛容さは失われる。一方がある行動様式を絶対として要求した場合は、他方はその行動様式に順応するか、反発して自己の行動様式を守ろうとするか選択を迫られるからである。後者において、協同は難しくなってしまう。学校臨床センターとの協同が“すばらしいこと”として、簡単には進まない状況が本校学校現場に存在している。この連携推進を積極的に進めればするほど、その嫌悪も一部においてより強くなる。今回、私は、学校臨床センター研究員として2年の時間を過ごした。こうしたことへの対応として、私がとった思考と行動の時間は膨大に及ぶ。読んだ書物も社会学、思想哲学、心理学、教育学と、私の思考は渡り歩いた。合わせて他の目的で行なった学校見学によって、ついでに学校がどのような特性をもった社会であり、どのような問題を含んでいるのか、明確になった。新しい世界づくりをいかに行なって行くのかについては、停滞期から抜け出せない日本の課題そのものである。いかに解決してゆくか、現場の課題でもある。